

## 1. H13年度調査結果の概要

# 1) 全国の河川及びダム湖における生物の確認種数の状況

河川（1級水系119河川、2級水系33河川）及びダム湖（84ダム）における調査結果は、主に以下のとおりです。

**河川で「日本野生生物目録」掲載種の約8割の魚類を確認**

**河川で「日本産鳥類目録」掲載種の約5割の鳥類を確認。**

**ダム湖で「日本野生生物目録」掲載種の約4割の両生類を確認。**

平成13年度の河川水辺の国勢調査における現地確認種数を下表にとりまとめました。調査結果をみると、魚類のうち淡水魚、汽水魚（「日本産野生生物目録」掲載種）については、日本に生息する魚類の約80%が河川で、約70%がダム湖の河川水辺の国勢調査で確認されています。また、河川では鳥類の約46%、ダム湖では両生類の約39%の種が確認されています。

表 平成13年度調査における現地確認種数（平成14年10月1日現在）

	調査項目	確認種数	「日本産野生生物目録」等掲載種数	確認率 / ×100
河川	魚類（淡水魚・汽水魚）	260(158)	200	79%
	底生動物	878	-	-
	植物	2,551	8,118	31%
	鳥類	260	568	46%
	両生類	21	59	36%
	爬虫類	15	87	17%
	哺乳類	57	188	30%
	陸上昆虫類等	5,960	33,220	18%
	ダム	魚類	135	200
底生動物		628	-	-
植物プランクトン		192	-	-
動物プランクトン		105	-	-
植物		2,225	8,118	27%
鳥類		170	568	30%
両生類		23	59	39%
爬虫類		11	87	13%
哺乳類		61	188	32%
陸上昆虫類等		5,035	33,220	15%

注1) 植物と鳥類を除く各調査項目は、環境庁「日本野生生物目録」の種数を掲載。

注2) 植物は環境庁「植物目録1987」の維管束植物の種数を掲載。

注3) 鳥類は「日本産鳥類目録改訂第6版」の種数を掲載。

注4) 魚類の「日本野生生物目録」の200種は淡水魚、汽水魚が対象。河川での国勢調査結果では海水魚を含む。(158)はそのうち「日本野生生物目録」に記載されている淡水魚、汽水魚の種数を示す。

注5) 底生動物と動植物プランクトンは、掲載されていない分類群があるため、種数の比較は行っていない。

## 2) 全国の河川における特定種等の確認状況

### 岡山県の吉井川でアユモドキを新たに確認

### 九州の筑後川でヒメモクスガニを新たに確認。

現地調査において確認された調査項目ごとの確認種のうち、環境省レッドリストの絶滅危惧 A類（ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種）に該当する種の確認状況を下表に示しました。

岡山県の吉井川でアユモドキが新たに確認されました。本種は、琵琶湖淀川水系と岡山県の吉井川・高梁川・旭川にのみ分布しますが、本種の生息には、生息場所である河川と産卵場所である水田地帯をつなぐ農業用水路との連続性や生息場となる岩場や石の間、石垣などが河川改修によってコンクリート化されていないことが重要です。吉井川は、このようなアユモドキが生息できる貴重な環境を有しています。

レッドリスト記載種ではありませんが、モクスガニの近縁種であるヒメモクスガニが九州地方の筑後川で河川水辺の国勢調査としては初めて確認されました。ヒメモクスガニは中国の沿岸から韓国黄海沿岸に分布する種です。日本では、「日本に産しない」あるいは「有明海にのみ産する」など各文献で記述が異なるなど、最近は確実な報告がありませんでした。今回の確認は非常に貴重なものと言えます。

表 平成13年度河川水辺の国勢調査における絶滅危惧 A類<sup>注1)</sup>の確認種リスト

No.	調査項目	目和名	科和名	種和名	河川
1	魚類	コイ目	コイ科	ニッポンバラタナゴ	菊池川
2			ドジョウ科	アユモドキ	吉井川
3			シラウオ科	アリアケシラウオ	筑後川
4				アリアケヒメシラウオ	筑後川
5	底生動物	コウチュウ目	ヒメドロムシ科	ヨコミゾドロムシ	阿賀野川, 櫛田川, 由良川, 那賀川
6	植物		キンボウゲ科	エゾキンボウゲ	後志利別川
7			カワゴケソウ科	カワゴケソウ	川内川
8			ゴマノハグサ科	キタミソウ	江戸川
9			ゴマ科	ヒシモドキ	旭川
10			ユリ科	シラオイエンレイソウ	湧別川
11			イネ科	ホソバドジョウツナギ	釧路川
12			カヤツリグサ科	ヒメウシオスゲ	高瀬川
13				トサノハマスゲ	仁淀川
14	鳥類	コウノトリ目	トキ科	クロツラヘラサギ	六角川
15	陸上昆虫類	カメムシ目（半翅目）	ハナカメムシ科	ズイムシハナカメムシ	天神川
16			ツノヘリカメムシ科	ツノヘリカメムシ	明石川(二級)
17		チョウ目（鱗翅目）	シジミチョウ科	シルビアシジミ	揖保川
18		コウチュウ目（鞘翅目）	ゲンゴロウ科	コガタノゲンゴロウ	天神川

注1) 絶滅危惧 Aは以下の資料に基づいた。

魚類：環境省レッドリスト(1999)

底生動物・陸上昆虫類：環境省レッドリスト(1999・2000)

植物：環境省レッドデータブック(2000)

鳥類：環境省レッドデータブック(2002)

両生類・爬虫類：環境省レッドデータブック(2000)

哺乳類：環境省レッドデータブック(2002)

注2) 底生動物と陸上昆虫類については、A類とB類の区分がないため、絶滅危惧類を示した。

## 【アユモドキ】



(写真：岡山河川工事事務所)

アユモドキは日本固有種であり、琵琶湖淀川水系と岡山県の吉井川・高梁川・旭川水系に生息していましたが、著しく減少し1977年に国の天然記念物に指定されました。

本種は、川や池の岩場や石の間、(コンクリート化されていない)灌漑用水路の石垣の間などに隠れる性質が強く、主として朝晩に活動します。動物食で、ユスリカ、トビケラ、カゲロウなどの水生昆虫のほか、イトミミズやミズムシ、陸上昆虫なども食べます。

## 【ヒメモクズガニ】



(写真：筑後川工事事務所)

ヒメモクズガニはモクズガニの近縁種で、上海から北部中国沿岸、朝鮮半島黄海沿岸に産し、日本においては、「日本には産しない」あるいは「日本では有明海のみ産する」など、各文献において記述が異なるなど、近年日本での確実な確認情報はありませんでした。

本種はモクズガニのような遡上降河は見られず、浅海の泥底で生活していると考えられていますが、生態については殆ど解明されていません。

有明海には、本種と同様に、日本国内における分布は主に有明海に限られていますが、同一種または近縁な種が、朝鮮半島や北部中国の沿岸に分布している下記のような種が生息しています。(日本が大陸と地続きであった頃から残っている種と考えられる。)

魚 類：エツ、ムツゴロウ、ヤマノカミワラスボ、アリアケシラウオ等

# 3) リュウキュウアユが沖縄のダム湖で復活。

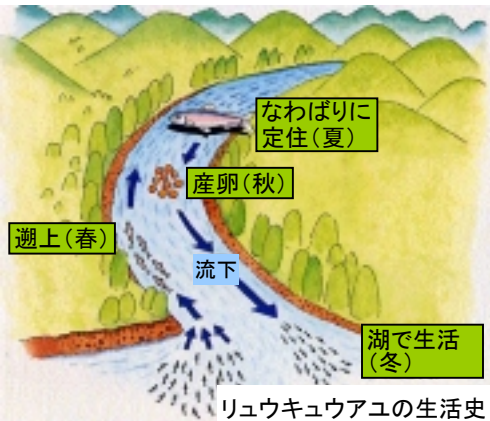
リュウキュウアユは、沖縄本島と奄美大島に分布する琉球列島の固有亜種で、海と河川を往復して生活する両側回遊魚であり、石の表面の付着藻類を餌としています。

環境省のレッドリストの絶滅危惧ⅠA類に指定されていますが、沖縄本島に生息していたリュウキュウアユは1980年頃絶滅したとされています。

平成4年度から、沖縄総合事務局北部ダム統合管理事務所が管理する3ダム（安波ダム、福地ダム、辺野喜ダム）において、保護活動として、奄美大島産のリュウキュウアユを平成8年度まで放流しました。

今回の平成13年度調査の結果、6ダム（安波ダム、普久川ダム、新川ダム、福地ダム、漢那ダム、辺野喜ダム）のうち、過去の保護活動を実施した安波ダム、辺野喜ダム、福地ダムの3ダムと辺野喜ダムと水路で連結している普久川ダムにおいて、流入河川やダム湖内でリュウキュウアユを確認し、確実に定着していることが伺えました。

リュウキュウアユは本来、稚魚期を海で過ごしますが、当リュウキュウアユは、ダム湖を海の代わりとして生活しており、ダム湖が貴重な種の保存場所となっています。



リュウキュウアユ



リュウキュウアユ

辺野喜ダム(S63完成)

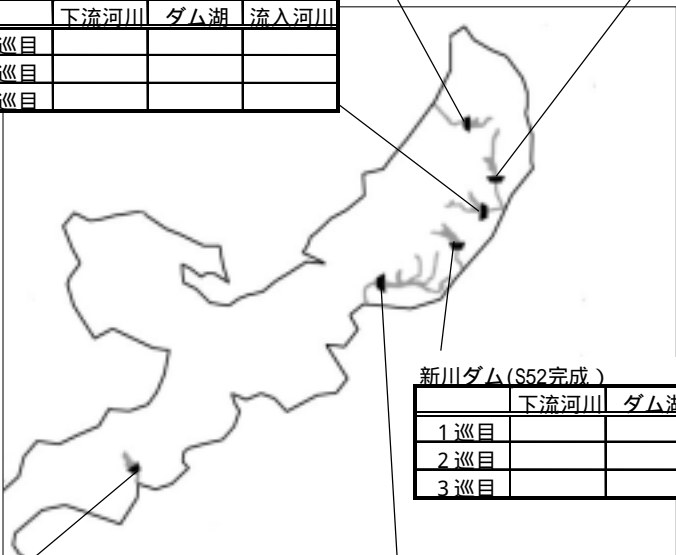
	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目			
2巡目			
3巡目			

普久川ダム(S58完成)

	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目			
2巡目			
3巡目			

安波ダム(S58完成)

	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目			
2巡目			
3巡目			



新川ダム(S52完成)

	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目			
2巡目			
3巡目			

漢那ダム(H4完成)

	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目	-	-	-
2巡目			
3巡目			

福地ダム(H3完成)

	下流河川	ダム湖	流入河川
1巡目			
2巡目			
3巡目			